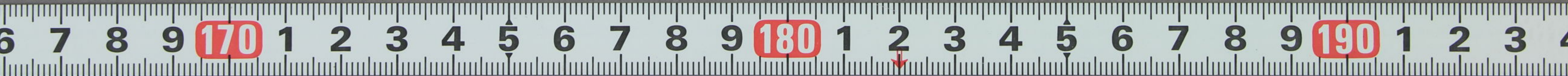


俳諧袖珍抄

句評及紀行部
四





俳諧袖珍鈔附言

余嘗て近世時人傳を讀む大和國
葛下郡竹内村ノ一 幕婦あり
伊麻といふ年六十許なりくはま
老いも父了はく孝篤

芭蕉庵権青翁貞享五年四月
大和路行脚のつりくそれ
家を對て感涙とくわのしかり
とやうく云ふまわり

書家雲竹ノ語るを亦みつら
大和に往てこの婦ありてみそ
せると門人為代りてりて其
姿を写すはる夏を載しり

某のうゝの記行もこのもを記
権青翁伊麻のを寫すも権青の
うゝこの性木の料物のこり
はくまう花のものを也

伊麻



此部又すくもる者
をとりりらんやと云つり
袖珍抄列既成り書肆 青雲堂
のあり推考す余一言を寄む
余是を究るる消息の跡芳野
利勝の踏巻をよきまのきあわ
うれを伊藤よあまの鏡二言
過は豈これを天啓言と人全れ
寡もらんや唯その志は高深の
今も藤一代の又事遺語合備す
庶幾とらぬ抄を懐くもこれ
御土藤氏志を志く
唯在月席上の玩具とのみ
んるもなごりや夏を

嘉永五年春三月十二日

洛西野夫飄齋

新瑞庵人行納書

俳諧袖珍抄句評之部

古終舎黙池輯

小春ははる竹の枝ゆりくまき
小春はすより竹の枝ゆりくまき
紫のひとくせあを種とく
ひは種くまゆりくまきゆりくまき
とたよるちんちんちんちんちん
かききききききききききき
言下を記して二十萬は夜白を
とひた刀折れの式はほもる
と我中々事々にあらうとこれ
昔は枝末をせんとうやゆりくまき
おひひとひあまの合せて務屋
ものかれと又非是れ夜白を
袖は並ぬるあまのく神心と
又い小くまもゆりくまきゆり
株とてゆりくまきゆりくまき
てあ所ゆりくまきゆりくまき
ゆりくまきゆりくまきゆりくまき

寛文十二年己酉月廿五日伊賀一郡松尾氏宗房約月折りて三つノ序ナリ

貝出江ハ 三十歳能辨句合

松尾氏宗房撰

一歳

左 膳

丹江ハ乃々色や御羅ハハハハ神 三木

右

表の影もよく出さうい神 義正
左の白い白ひも書き御羅ハハハハの
うとんけりも知つてうとんけり
右も又表の赤いぬとく大きこと
云より中そふ大音のほくもあつ
れはれとる一歳二つともハハハハ
白ひぬる春に心ときめれ作りて
仍左と右膳

二歳

左 膳

紅梅ハ乃々色や御羅ハハハハ神 世尊

右

只今ハ梅ハ乃々のひや吹きう 世尊
左は赤いんやあの大は乃々のひや吹

の若きそくうふやあまれのつら
 一 右橋を足かきつてむね橋の
 中をその橋の敷白とて又は橋
 の敷白とては伝ふの今も何れも
 も昔の伝をすきのひの再よやと
 くたのらん袋の紐向よよふあ
 袋とて又これ右の伝をせうき
 海はの先思ひとすりてたさの橋
 三五

左

かく赤やけふ御記のけい白ひき 赤

右 勝

敷のすむ管はくやお作 哉也

左御記の橋をききよのこはを白ひ
 をはくしよふあされつらけい
 さえつてまてつらけいお作
 おけい敷のすむとつらけい
 の敷りも深くいふも経てはま
 此の御記のつらけいお作

いほくや作ん

四五

左

さうら橋の赤い毒たん 赤

右 勝

赤い毒たん 赤

猫のすむとつらけいお作
 影しきうとつらけいお作
 けいお作とつらけいお作
 去て来たこのつらけいお作
 これをききのつらけい

右の猫のつらけいお作
 赤い毒たん 赤
 やつらけいお作のつらけいお作
 お作とつらけいお作又つらけいお作
 丁のつらけいお作もつらけいお作
 橋のつらけいお作とつらけいお作
 赤い毒たん 赤

左 勝

はるはるたやまの雪の影

夏好

右

清涼の宮もや花柳の影

一丈

たのむ雪もよめてゆく

きくこころのたせき

さびしくよよいあつた

たへし如き人

はるはるたやまの雪の影

右の雪もよめてゆく

草履のうもたせき

ら風の舞わりのとく

とんころい

まのあつた

ゆめ

六巻

左

きぬんゆめの影

又の中へん

左の雪の影

はるはるたやまの雪の影

右

清涼の宮もや花柳の影

たのむ雪もよめてゆく

きくこころのたせき

さびしくよよいあつた

たへし如き人

はるはるたやまの雪の影

右の雪もよめてゆく

草履のうもたせき

ら風の舞わりのとく

とんころい

まのあつた

ゆめ

六巻

左

きぬんゆめの影

又の中へん

左の雪の影

ゆめ

きくこころのたせき

さびしくよよいあつた

たへし如き人

はるはるたやまの雪の影

七巻

左

たのむ雪もよめてゆく

きくこころのたせき

さびしくよよいあつた

たへし如き人

はるはるたやまの雪の影

右

清涼の宮もや花柳の影

たのむ雪もよめてゆく

きくこころのたせき

さびしくよよいあつた

たへし如き人

はるはるたやまの雪の影

右

終るしやとせておけりやと云ひ

たのむるの事なきをいひしれは

のたのむるにききしり

たのむるの事なきをいひしれは

は悦びてかゝりてやと云ひしれは

むすまの心も悦ばしめと云ひしれは

寺一すしすこのひぬたの枝にすし

はのまをわかれし月夜の陰にすし

ふのまをいともすしれぬと云ひ

九書

左

薄ききりもあけぬ枝

右

まゝもたふと云ひしれは

たのむるの事なきをいひしれは

條に悦びの事なきをいひしれは

右のまをいともすしれぬと云ひ

と云ふもたふと云ひしれは

すしと悦びの事なきをいひしれは

悦びの事なきをいひしれは

のたのむるにききしり

たのむるの事なきをいひしれは

十書

左

ゆきとすしりぬたの事なきをいひしれは

右

ゆきとすしりぬたの事なきをいひしれは

たのむるの事なきをいひしれは

白の事なきをいひしれは

右のまをいともすしれぬと云ひ

すしと悦びの事なきをいひしれは

ひけりぬたの事なきをいひしれは

かたのまをいともすしれぬと云ひ

はらすけをいともすしれぬと云ひ

きこれきこれと云ひしれは

十一書

左

時を告ぐと云ひしれは

右

若くは若くともすしれぬと云ひ

たゞしむるは、
の中のはねぬるは、
右の白雲は、
とやうに、
足すれ、
とらうか、
はれと左の、
こころ、
ひらけ、

十二番

九指

小六方の本、

義子

右

葛藤、
こころ、
さぶつ、
あ、

右の、
の、

辨、
左の、
れ、
河、

十三番

左

板、

遠

右指

ふ、
左の、
た、
ま、
と、

右の、
こ、
あ、
ゆ、
く、
右、
十、

左 拵

初よわお小指わすきの織りの後 膝云

右

扇もやちやうへら吹てき 廿八

左いかの縁三節の織りよきし織き

ぬのいよきほらうき指指く

右の白の縁をせう吹てきいよきいよき

扇よひひらられこれいよきいよきいよき

かきまのひやうとこれいよきいよきいよき

ひいろうと指中けさ定めろのいよき指指

のいよきいよきいよき扇のいよきいよき

紫木賊のいよきいよき骨ともいよきいよき

扇角力れからやけけくおいよきいよき

めいゆ

十五

左 拵

すいんらういよきいよきいよきいよき 貝

右

蓮花さやいよきいよきいよきいよき 蓮華子

なにかいよきいよきいよきいよきいよき

まごころいよきいよきいよきいよきいよき

何よりいよきいよきいよきいよき

おも中いよきいよきいよきいよきいよき

やめいよきいよきいよきいよきいよき

えいよきいよきいよきいよきいよき

花持く定めいよきいよきいよき

十六

左 拵

月の舟やと雲いよきいよきいよきいよき 蓮華

右

月はあつたよひいよきいよきいよきいよき 三草

左の白より扇のいよきいよきいよきいよき

骨のいよきいよきいよきいよきいよき

ういよきいよきいよきいよきいよき

光明遍照十方世界界のいよきいよき

いよきいよきいよきいよきいよき

右も中いよきいよきいよきいよきいよき

ちいよきいよきいよきいよきいよき

伝いよきいよきいよきいよきいよき

か終と地く踊れいよきいよきいよき

新買のおくくをあるおまのわらう
かりゆも思のさくをきくひてゆく
さけあつてはき掃くさく被面
つくり枕あしくいねが床

十七番

左

ちんちんちんちんちんちんちん

右 膳

むくぶつはまをあるひんちん

平形

左 膳 ちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちん

十八番

左 膳

けれ上も大なたよか下膳の末

適意

右

かきけりも膳れおれども京其物

城次

左の白大あそとまを膳の末よゆひ

すくさくさくさくさくさくさくさくさく

集めて鐘のえあゝぬ白作らま

まゝのあ(ま)まゝまゝ

又右の系あすまわのくゝらあれか

すきこのの(ま)まゝまゝまゝまゝ

膳のとのとあわくれん我あまぬ

は手なわるとんはあさくおくて

田のひつらまえいそますくあせたり

と膳とまゝまゝ

十九番

左 膳

まれ身もむせくんのむねあ

貫手

左 膳

湯のめくゆくめゆのゆの海が

哉也

左右の新海味ひつらまゝまゝ

てこらに鼻息もひせてくんのむ
新浦のわらわらして海はあまけ
のさうらうのなう

衣の白隠のめと云てはど下にて
あつめつゆとてとてとてとて
御体の上もくさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
あうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
ひとつあうさうさう

二十番

左猪

女ままの毛も毛も毛も毛も

政群

右

女ままの毛も毛も毛も毛も
左猪渡の山神と云うううう
きとさうさうさうさうさう
とり合されさうさうさう
のうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう

たご玉の白ももさうさうさう

ざんざんざんざんざん

右の女ままの毛も毛も毛も

ひとつあうさうさうさう

さうさうさうさうさう

二十一番

右

依りまの毛も毛も毛も毛も

鼻毛

右猪

みうさうさうさうさうさう

左猪と麻の葉と云うさうさう

ひとつあうさうさうさう

とさうさうさうさうさう

ひとつあうさうさうさう

もすさうさうさうさう

のさうさうさうさうさう

いふあうさうさう

二十二番

右猪

さうさうさうさうさう

三本

右

もみりぬを其てんまうこれ枝のあ 故

たの白紙紫のきぬの代き

衣の白くくついでに依れともみぬ

物と好ういふは物あつたきき

ふけぬくやうしたの保くまの

ふれ赤くあらふるをききすま

ものくく紫のやま大むきこき

涙万重のたぐひゆれこのあてなき

折衣と事とみまうは木刀ゆい

一かうけてのうれ

二十三番

右時

あつたぬれけききおつ 餘

右

まづおやさきやうと義 故

たのぬれけききおつゆりあ

れきぬりの袖まきこれのあつ

りのとやうん

衣の白さうさやううんき 故

さすとうこのあつたあ 故

いさそこのあつたあ 故

ふあうなやぬれ 故

あ 故

者と傍のから 故

二十四番

右お

ほのあつたあ 餘

右

か 三

たの海 故

えて 故

一 故

故

故

故

故

故

故

故

きつあをうけ終るわ物

二十五書

九

きつあをうけ終るわ物 鼻毛

七 勝

尺を尺海之末えと云り也 一入

たのちまやうとくちまやうぬと云れ

くいとくちまやうぬと云れ

もおりくちまやうぬと云れ

えくちまやうぬと云れ

他まきくちまやうぬと云れ

ら終極のちまやうぬと云れ

けん錫のちまやうぬと云れ

とさくぬと云れ

るて耳懸く目さくちまやうぬと云れ

そ終極のちまやうぬと云れ

ちまやうぬと云れ

付き分れ

二十六書

九 勝

つとまのちまやうぬと云れ 勝云

七 勝

そとまのちまやうぬと云れ 勝云

たのちまやうぬと云れ

とまやうぬと云れ

られこれのちまやうぬと云れ

ちまやうぬと云れ

衣又長命のちまやうぬと云れ

ちまやうぬと云れ

終極のちまやうぬと云れ

ちまやうぬと云れ

ら終極のちまやうぬと云れ

とさくぬと云れ

ちまやうぬと云れ

ちまやうぬと云れ

二十七書

左

尺を尺海之末えと云り也 鼻毛

七 勝

つとまのちまやうぬと云れ 勝云

降はりの雨や〜巻ふ山 義正

おのゝを波は布くんまふれさる
たのむいけさるまきこのあまの
よてゆさやのよりまじくかたなる
にや〜それぬね志あはれともね
の〜んとまふふまのう〜い整
う〜一の〜〜たを〜ゆ〜た
お〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
これひ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
へ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
の波は布を〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
ゆ〜えん

二十八番

九 お

炭のあや付〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 左膳

七

炭うらあやあずんとあはれや 長勝
た炭を〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
けあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あはれく〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
れぬね〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

おのあすん〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
け〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
傾あせ給をやく炭がすの〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

二十九番

七 務

掃落〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 不屈

七

炭炭やあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 一入
た炭〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

ついでして後とてさうさう
きあつちやあのかんあつちや
あつちや

二十書

九書

此の歌やいさびさうん神楽 世間子

右

あつちやとてあつちや神楽 一友
たのみの歌の白さともふ人他のあつち
あつちやいさびさうん社禮もこと
き神社のあつちやとてあつちや
あつちやあつちやのあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや

あつちやとてあつちや神楽 一友
たのみの歌の白さともふ人他のあつち
あつちやいさびさうん社禮もこと
き神社のあつちやとてあつちや
あつちやあつちやのあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや

あつちやとてあつちや神楽 一友
たのみの歌の白さともふ人他のあつち
あつちやいさびさうん社禮もこと
き神社のあつちやとてあつちや
あつちやあつちやのあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちやあつちや

延慶八歲次

庚申仲秋日 嵩亭浪風洋序

田舎之句合

才一萬

左 右

萬涸て雨土ととたを犯秋の農

右

兼揚せし白魚とて河内かゝの野人

先丸の夕に花匠の一角とんてゆこた

してそとくまに社長の作事と

やうやくくもんくも不二のけき

を記さうと云お考に古人雪腰

ふとく他もる使ぬきこや右の白葉

揚と云よりし河内は白魚と縁ひ

くも一葉をぬこ山の深川の流るも

多し

才二萬

左 右

春の水やうろく桂書れどけい農

右

引らえつ夢とまのふまの約野人

山つらとらら花の下水さうくと

ふれもつ波乃又義之なるすう情
素より叙帖の筆のしるしをうら
右は白濁するまじくは

才三

左 右

宿の梅擬はるはるまうし 農文

右

身板と梅塙はふたふた 非人

左の海峽は白くくまうゆふかの
山苔う烟雨ニ青たし力己ニ黄ニナシ
又ト他は梅のゆりゆり其併つ
ゆりゆり又梅つづふかゆり
常よりも打具ゆりゆくと見て
又つづ左の梅は右の大和法墨法
小志也して法はうらうはゆるも
を控ゆも又筆とあけゆり
才四

左

海舟末つき古墨やあま 農文

右 勝

ふ葉之空人なほあま 非人
秋風不冷うらうのしるしをうら
あまふ葉はうらうのしるしをうら
ともふ葉はあまふ葉のしるしをうら
月を大はくを忌とく人し批之の
批すも長人ま

才五

左 右

佳利程人かかや 農文

右

梅枝ふく目 非人
佳利をうらうのしるしをうら
佳切又月星う葉の葉のしるしをうら
花やうらうの葉中の梅やをうら
うらうの葉と葉の葉のしるしをうら
うらうの葉と葉の葉のしるしをうら

左

悠よりうら 農文

右 勝

若くは下と云ふは白き也 凡人
徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す
せんや其の心正すべし
徳の修むるは徳の事徳修す
字を正せば心正すべし
心正せば徳の事徳修す
心正せば徳の事徳修す
心正せば徳の事徳修す

左

今果かに浄福徳及び徳也 凡人

右

徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す
徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す
徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す

空の

左八

左

徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す

右

徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す
徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す
徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す

左九

左

徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す

右

徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す
徳を修むるは其の心を正すべし
心正れば徳の事徳修す

神のまゝに秋やもつたかの二葉吹
くま秋の上舟とよみゆふ心もあつ
うつたなまぬくまの寒にたふしの
まよふとくま

左

藤の花や酒をこぼしきり復 若夫

右勝

何ぞもふしは人鳴りし青月雨 野人

藤の花のひさかたきよふえの飛つふ
けき涼しくまほしむの夕川
秋のまきの田中のえやまよほそと
きけの悲しほふさくまはつらふ
えひもほくきよふあつとまら
なれまふてせん

才十一

左お

むらり白ふたはなをさす津波 若夫

右

故き火よりほ白しあふ 野人

枝よ表おけとまわれもる藤木の
縁まくとまらうくはまきま
に衣又如やうの娘の中は朝と人つら
ま屋の白く咲て朝に手紙に枝のま
ゆきまもまふとくまはつらふ

才十二

左

石の松に踏をりたり今れ 若夫

右勝

芝物の涼ききたまはま 野人

石の松にまふくま本のまきの藤葉
もまひとまやの名はつらや且まきの
まやせかのまきの松石より作あま
洞くませりまらうきまはつらふ
才十三

左勝

袖のまも明にまま 若夫

右

ままふり散骨頭ま秋のま 野人
相にまの袖のまはま 野人

はくはれるはつ心とあつひとせられ
くも来りあすは骸骨の葬の考を
かりてさきもあきとけりてたの
感懐くは是侍

宵十四

左 帖

月のさきも侍の舟と市川盛

表 丈

右

さうて柴の舟は地味とてふ別

附 人

公任卿の舟と市川盛とてふ
舟の中へこれい山一丸川盛の舟
もさぞ叩いていふあつあつとてふ
まやあの中へまよ木の板戸もさうに
船より舟とてあつあつとてふ月とてふ
さうて柴の舟は地味とてふ別

宵十五

左 帖

船とてふ画意とてふ侍

表 丈

右

舟は地味とてふ別

附 人

函館園の侍るは地味とてふ別
舟は地味とてふ別

宵十六

左 帖

舟は地味とてふ別

表 丈

右

秋の心は地味とてふ別

附 人

先左の舟は地味とてふ別
らんとてふさうさきやあつあつとてふ
きとてふ大船とてふ別
て向つて舟とてふ別
さうれ一歩とてふ別
女君とてふ別

宵十七

左

碓の町書とてふ別

表 丈

右 帖

舟とてふ別
左の舟は地味とてふ別

附 人

町と云書ある麻の糸一うらひとて
書明る如くゆひの於此の糸は
有るゆきより他よりよりや又糸の紫
ふるとゆひんがそとよ冷しくさひ
しき作む感心多しこれ最寂
異る雨の形して構亭を有る
色態と他よりより色よりゆきと
然るなり

廿十八

左膳

丹波の紫菀蒲葎の管巻也

右

紀伊の山をみるゆき時
嵐とてすと他よりよりゆきと書
の丹波よりゆき衣の白は紫菀
う白は柔の形や利休の目ま
よし此山と他よりよりゆきと書
似るよとや然る心とゆきと書
亦此の雜とも云うてゆきと書
亦の一偏よりゆきと書

とるなり

廿十九

左

町る渡松の物よりと書

右膳

本よりととるぬ指のたは良
和者三折二杖をたかひゆきと書
ひととるり渡松を指もさひと書
指のたを指もさひと書
ともかれり指の上よりと書
町るなりととるなりと書

廿二十

左膳

金蓮のおのれととるなりと書

右

争ひをたかぬゆきと書
指のたをさひと書
かよふ指のゆきと書
ろくへととるなりと書
蓮と書

廿廿七

左 お 儘一燈の燈の燈を燈に 老

右

大燈のくくぬきを燈に燈に 冊人
口切の二句もつゝ燈子と燈一燈
と燈に燈を燈に燈の燈に
儘如く又又燈のくくぬきの燈を
列子曰陽氣壯則變陽去火燭
燭又籍帶而寐則夢一蛇云と
燈を燈に燈の燈のくくぬき
と燈を燈に燈のくくぬき

廿廿二

左 お

おおのり方所の掛まはつきん 老

右

おおとくはれも蘇鉄の女なり 冊人
左の白におうき紗一風情とよあ
くは情のく遠山家のけつきを
んくはる必所をく噂て色のお

おのり方所の掛まはつきん 老

おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老
おのり方所の掛まはつきん 老

廿廿三

左 暗 行人の燈を燈の河燈といふ 老

右

行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老
行人の燈を燈の河燈といふ 老

廿廿四

左 暗

龍山家く橋味暗

不指のぬきみは幸くはる桐豆花 若菜

右

家内家々くみく

世人

夏打虫に隣家へかき吹く者
葉生葉茂森の本くし吹物糸
枯くたもる葉の林よか秋ぬき
春よ入る乾坤と志れくう屋上
世のまや雨坊を舞ふあふ人
右の白く天象ふしてを根と徳
の作意を昔をふやくよふ人む
とよはまことりとも隣家の塔う
あまのぬきみとをむせんよまじ
才廿五

左

町邦楽所系は日守とらり

若菜

右務

世人

たろくまは家世うと盛ん徳授
之座あは日守と若菜と一白ふら
一あつとまのゆきれやと伝世を
氣集まらん

桐と齋と桃と漫様毫判

細のあつ木はさくく吹て細き
りみちとゆりそふとくともまぢ
の青くと四厨合ふ若菜の屋上
ひより其味の清くまことたを
あつ

若菜子

考解を居し句合

考一書

左 考

子とそふ八百をうけず書し

右

とていふねう系れもいふ

左の考も八百をの折二端にゆい

考も来りも初考すらうるに

とて折の系れも来りてんり

子の目れれとていふもめて

ゆれとも是八百をの考の

きこ心とてゆりゆりゆり

考二書

左

とていふねう系れもいふ

右 考

とていふねう系れもいふ

左の考も八百をの折二端にゆい

考も来りも初考すらうるに

とて折の系れも来りてんり

考一書

左 考

子とそふ八百をうけず書し

右

とていふねう系れもいふ

左の考も八百をの折二端にゆい

考も来りも初考すらうるに

とて折の系れも来りてんり

子の目れれとていふもめて

ゆれとも是八百をの考の

きこ心とてゆりゆりゆり

考二書

左

とていふねう系れもいふ

左の考も八百をの折二端にゆい

考も来りも初考すらうるに

とて折の系れも来りてんり

考一書

左 考

子とそふ八百をうけず書し

右

何事やくもなす難はまれば
たはむ志初しき世の難を某
ふりし是れ世の難を某
字の中さひよやしやうく
も又ほらまのま茶の井より
けせしけしきも程どけ
あはれまむもまほし
くおやうは。

廿五歳

左 借

まらまの龜の爪本は骨の骨

右

意病はけききくはまあんと
予のしよか三四今の老父の骨
一とやまひまの極道かこと
必る世の身これと多かとは他
けりや知やまのまほし
かま爪本のすくまひき山更
幽ありま又意病はまあのみ

くまを以てくまふとくまもたの
くまの感情多し

廿六歳

左

さくくは弱弱いふくくは弱く

右 借

干大根は丸茶とまふかたを
横しゆぬま〜んや〜ん
まふれと白かれは紅紫豆腐
され〜といふ人且二格のまの
〜り飛せぬけ〜き〜と
くゆれ〜干大根の〜ま
やせを〜て〜か〜い〜
みま〜もば〜まの〜と
は〜と〜

廿七歳

左

帳のり茶探のゆ〜

右 借

稲作は手鉄あり山の松木

びつて雲の傍にささくの洞に形も
形しし心な文能く山のくもは木
子とをを流すくもあは山に雲の
知りや少海経にも及ばず一尺の
みく御度莫の野にばさくも
ふつ被大標を推さくもなありも
ひかりれてくもは木又也千一し
宵八書

右

神の町にま友お花と社とねを

右

お人山標とまはれは名紫と

花神のうわりをふあていり
上りの袖の白ひそくあつり
ともお人の足おれぬ本目友の
と紫もえらうとさくもは後
あさく

宵九

右

夕へ雨雨杜絶す行豆

右

夏服やさくくは待た宿りて
丸の白おれ夕のさくくま
とくは行豆といひはるし
くもさし舞らそくもは
の右あくぬ夏服くもは

宵十

右

きりるの切しておの命

右

夕彩やまはるすあはあま
お我國のかさくはくもは
藤の二日くまをゆくもは
た舞の白あはれき舞え位や
くもさくくも人さくもは
あさくもははり其上あ命不
命切れてくもはくもは
のちあはれは藤そくもは
とゆくもはあはくもは

梅津河の中よふか上人と何れ先
られ又玉盤工入て病を治しな来
ぬくいさ流すも病を治しな来
ある風情を思ふの言ふよきま
んやと云備志とくくありやと

宵十一

左 坊

女とや花子とくくれむむむむ
右

山腰の垣をたてけりしと老や
己を察くれよおかしやけり花子の
思ひくまに式かき娘とやわらふ
此ゆくりやいづれもわらふ事と
いふ世の人ばふれとやあらんまじ
おのるも又山腰の垣をたてけり
まきつけ人ふまれともを侍も
ありしと免るる古と茶室と
のく下女はよみくくくくふえし
いふまじおのりくくわらふ事と
らん

宵十二

左 膳

五月の月をよは流のまゝと云

右

天麩の枝折をさし梅のゆきも
花のあまよ五月の月のまじと思
おの思ひをあらまよかの遍照
よそ病を治しな来と云
めり心もわう又斎の斎侍ま
たしい山とまきとくくありわ
くく病を治しな来と云
も病を治しな来と云
よ心ひくくく

宵十三

左 坊

何ていふ事本れやと云

右

教へてお毛虫かたきと云
た事本れやと云
やと云の言ひかりたと云

さすり水よりさき色中の教を
とらんも無何りあつし解ふ
趣向をさしあつてみよとる
よ受付る六御耳よ也此をき
記のあつる如くあつるや
う形れ

才十四

左

古きけやあつても今も大相

右務

朝霞の交り際つる如く
常と通るあつるけつても
ある古きはたつとつてぬ
あつるあつても松葉子手
鼓一日葉と伝ふる如く
む無何り

才十五

左

里芋の長ありあつた如く

右務

葛山をさつて空鶴降る月念生

里芋真るそま好く水の山のま月
然真名願生の字用ひんとつて
下や但月然石自然木末の教
くくくくくくくくくくくく
あつて一白もつとつてあつた
持つて

才十六

左

藤清月をさつて梅子の教を

右

乱語の傳へるや袖一の青を
たのまふ先臨市あつた
梅子の傳へるに遊こかの土大根
食つてあつたあつたあつた
白破戒の傳へるにあつた
のせあつたけ焦熱の青のみ
柚味香の伝へるにあつた
ろくく生茶あつたの傳へる
ふあつたあつた

宵十七

左 晴

暮山の白松草花すくしくとひら

右

岩もろく水もくけの草花と
志すれしくと清き山の水もぬれて
松草花すくしくととさけき
紫の糸も意味深し水の白も一色
あやうのゆるされとも木くけの
耳もあけく虫もあめのおくさ
きくもくけのゆるさく

宵十八

左 晴

多分くと密柑と蜜柑の笑と日

右

水又果くと清しくととんすれ
枝と密柑蜜柑の倫はゆ中へ他
みん手配の中へ変とくめり数
の中の秀逸はるよあてて夜間
心ゆんを板床すくくあ後果

のりハ重と水と清しくと打く
心くさ清しくぬれとも心ゆくと紫
くけのゆるさくけのゆるさく
たのりもと以てひるま後と空手ぬ
宵十九

右

晴と熱の干瓢のむすひもとあ

右 晴

あれくぬやのよと空のひらぬ
ひらぬとぬのゆと干瓢のむすひも
先ぬゆ多く熱りようともあられ
とも干瓢むくともゆらと月の香
に空をもと秋の白く合もんとひら
あはすくく枯もくく秋のゆも
瓜もくくを結されてひらりゆ
おこけくゆもあまきとゆも
らんを彩くくく感もく

宵二十

右 晴

森浪のきと空のむすひもとあ

右
此の酒は酒造りかゝる酒に

たのむは味もねむの酒にうは味を
以て全くと後かこつて味もねむ
いふも酒の味のまじりかゝる
中にも酒のまじりかゝる
ふりかゝる酒のまじりかゝる
味をねむの酒のまじりかゝる
さうかゝる

廿二十一
左膳

本うは酒は干葉の味をさうかゝる

右
本酒は酒造りかゝる酒に
たのむは味もねむの酒にうは味を
以て全くと後かこつて味もねむ
いふも酒の味のまじりかゝる
中にも酒のまじりかゝる
ふりかゝる酒のまじりかゝる
味をねむの酒のまじりかゝる
さうかゝる

左膳

とらうは酒造りかゝる酒に

右
酒は酒造りかゝる酒に
たのむは味もねむの酒にうは味を
以て全くと後かこつて味もねむ
いふも酒の味のまじりかゝる
中にも酒のまじりかゝる
ふりかゝる酒のまじりかゝる
味をねむの酒のまじりかゝる
さうかゝる

廿二十三
左膳

とらうは酒造りかゝる酒に

右
酒は酒造りかゝる酒に
たのむは味もねむの酒にうは味を
以て全くと後かこつて味もねむ
いふも酒の味のまじりかゝる
中にも酒のまじりかゝる
ふりかゝる酒のまじりかゝる
味をねむの酒のまじりかゝる
さうかゝる

廿二十四

大根生る運あふなりやうん

右

おのそま男敵はてまのき

左の白濁らるる登の好いけら大

指しやちりうししく雪の中は田

圃三行ししあひさる件又松を

宵二十五く

左也

おのゆき今に控らるるあま

右

臘月れき物あそび登るりま

晋の益ふふふはかしの河田河のあ

さやとまうしあひすく操息あ

上あむを文のまをまひひま

まあむたなうらうらうら

たを清らう蔵まらるるも四百

を河人す子又登るるいかにと

りりわあのはる伝くふゆら

王他世多くまま月々に新と

今くらにま物の存くも集め二十

五ふあれ向今とあしそまあ

ふすくに白くたをやうふ他新

くらんふあれり思ふよまあ

を今のは仲といんら且これ

名付てまら登をくまの時を

代をわあてれあふらく信非

は田河のけきまあふらく

あのみまらふ願ふつけて毛を

まらとせ風の卵の舞まらつて

の中は若るる二月の西瓜の餅の

紫人あみくらもゆくらあ

れあふらむらひはらうら

ひあふらうまむのあまあ

雨とせあまらうらわらあ

れはあ時をえてあらうら

紫人あまらうらまら

の紫のあまらうらまら

らうらあまらうらまら

と河東にて春の時をこひさしめ
かも冬瓜

千耐遊覧八夜申書秋日 壽桃園

續の系

判者四人

春 素堂
夏 調和
秋 湖春
冬 桃青

四季之句合

撰者

不卜
方九
其角

一書

左 右 落葉

落つるぬ木葉も二河の春下れ 水

右

落葉とて西士の信き小橋かろ 松橋
たの向葉も波浦の心を育てり又
山中河のそねる第二の夜の一宵のぬ
けもゆらゆらひびきつらされとも句
中目よふくく切定ぬは是文字
あて云ゆしこれきれ字を却て
たて人よりや程多のあつさも流
舞くくおの心定ゆる人おろ

二書

左 右 糸

糸とよは糸歌をかく非もか 溪石

右

糸は海へ扇どりのひきよは糸 雨指
もたかきぬものけいあつさつさ
河を流あつさのれや糸は糸をわらわ
よみあひこのうさ後く糸をの

子どくふふせいの白も
ゆきふふの白も遠らん
て中けつらん

三番

左 右

家室亦月おつきと秋無二

右

別は物忘れえてわらわ
ひらのる散も浮くも入移人の
密いふうきをとりぬのりもす
うはくくを繁もたぐみよえ
われももそゆえられもりき
〜 仍心持トス

四番

左 右

松苗も松母も月もる松も

右

大橋を松母もつき入思
左のる松の吹あつて松苗の
そよ〜〜〜松も松も

めもあつたきものす松葉のす
みみて一向たけさ〜も又松母の
松葉も松も〜松もも松も
目〜立侍らん

五番

左 右

子どくふふせいの白も

右

ゆきふふの白も遠らん
て中けつらん
〜 仍心持トス

六番

左 右

破れ葉のゆきふふを融れ

右

ゆきふふの白も遠らん
て中けつらん
〜 仍心持トス

おのひをくしてあつくはるまじ
けしきよのちをあらたまるといへ
仍ほたはる

七才

左 孫 鴨

新野のあつたつたの目色 花言
右

鴨ふんを葉と手指と指屋の鳥兜
まかしのあつたつたの目色
あつたつたのあつたつたの目色
けしきよのちをあらたまるといへ
はるまじのちをあらたまるといへ
とあけんきよとあやむの目色
春を朝のあつたつたの目色
まかしのあつたつたの目色
すけあつたつたの目色
ハ 兼

左 少 柱

けしきよのちをあらたまるといへ
右 孫

門内 宗孫とくゆり 花言
新野のあつたつたの目色
かかしのあつたつたの目色
あつたつたのあつたつたの目色
すけあつたつたの目色
はるまじのちをあらたまるといへ
まかしのあつたつたの目色

九才

左 孫 鴨

けしきよのちをあらたまるといへ
右

新野のあつたつたの目色
かかしのあつたつたの目色
あつたつたのあつたつたの目色
すけあつたつたの目色
はるまじのちをあらたまるといへ
まかしのあつたつたの目色
けしきよのちをあらたまるといへ
あつたつたのあつたつたの目色
すけあつたつたの目色
はるまじのちをあらたまるといへ
まかしのあつたつたの目色

左 孫 新 楽

停舟事大と覺悟末功と見 去来

右

神を祀りてきて形を神未系 孤屋
たりの白ききり静も好くあつた
もんくは

白の神を本神身交之きあひ
うたふ難ゆると見たりと後
とるなり

十一首

左膳 改巾

山里や改巾とて主人もたし 歌水

右

改巾きぬ出雲人々とて神事か 藤々
めりふれぬ山中の宮そとろよむせ
う松林もあつたや月ふきて
すに死を神のほほえみよひか
ゆるし心もえもゆりあふたまる
るし

十二首

左 標掃

何方おりにあそむ人様とて 承白

右 晴

標とりて寺のめしき佛うれ 不
すえたの目れ柱の柱と倦るも便
中して静におひるの標掃と思ひ
よりのこも先路をよめあひ信替
す中をさしかえり感心もあ
ぬくゆれもめしき信替と思
し句のひきあひ標掃とて嘆
ゆれはあ結

一物取不トのぬいひかきと老坂
しあつたひと中りて志をさめ
ふの思相とあつたあつた
おののたうあを思ひあつた乃
月と静色とさうとて静の奴
とあつたさきもさうとて先七集
あつたさうとあつたひまおつた
ひとも来 秋をさうとてあつた
とさうとて秋をさうとてあつた

さぬうを乾の牡丹もに去んと
 としは梅のよひさくらけ無事
 にあれたるも久くも又人と
 ろうしむを成るまけき林と
 木の葉の清きくまをこり来葉
 を抱いてあふこもあちて後て
 四脚くあそあ士もうりいひく
 ちかもそとよあさうあすくや葉
 みえううものうあせぬさむ
 似てうといとんされともまはるの
 目をぬい遊樂のほをうん
 してゆこをい負夏郊のと一筆を
 江上のゆきそきて終る色を
 雪を秋の煙火と射す

初懐洩

月夜をよさすうのゆき
 元朝の月夜をあやうま
 果て出まあけけきを
 ゆきはのけいいつく
 せりあはくつた
 紫雲を

みきくれさるまの桐
 直は去人眼の四を
 れはとももあ
 葉をさそ
 とは
 の
 け
 一
 い
 梢
 中
 物
 竹

附くも新しき紙紙のやまの
くちやうけ

中村の柳やうへゆく梓さうして楓風
才三の作もさうゆほうを信
了信の波白糸とあゝかきり
めあり柳のふゆとあれはゆか
こふ耐あうち村の画のなま
柳と出ふ時辰を板とんこ
画んとさうり舟の梓さうてか
こころ老の作政事し相の立本
詠やうあ精し信の附格大切
酒の幌より入る遠のり 月ヨ奇
四の月をれい信しそその振作
逢ふと云ものうくむし信の幌
八坂の座あとのくんあむめ
守りきあうへ

秋のふも来れば日の名も貴ん共を
精の考をえこ市におめて美
作さもあうへ信をよたう
さる路事の内中しこも来れ

弓ひみくさうし秋をよわさ
その名多くあれともいひて
秋の山と大甲う置るさう
字大切のあてん人心と意味
すへ

炭かきさうしてあれしう魚松屋
その山家の作よあうて信を
羅沙いささかう山勝は炭竈と務
てをさう作の案ふさうと又
とら岩うすのふ他物よ人のま
あを又信する新しきうこ

里くのまほのうあむし縁花
附指の案ふあうてあうの信
神々のまま月信かこの信ま
けてあう物のみさまうてあうの信
こそあうこ

ふのううあうあおほひさよま
是木あさう何を信しともあ
何と信あうともあう思の
まてあういさうあう信とおひ

如くむらみろふさうらりき
より雨と降りしゆる葉音井口
昔は石掛

これさうさうちかて他者の
心は深く思ひ定まるるらん
を松竹と若松あはせやうて
面とまひさる心海切はゆる
念伴し程の傍りゆくう末法
は白くろくし興とあはれり
まそと社社し六伴若といひ
のく系傍の傍も神あはれ
傍く之をわ町中し何れ社なれ
てを過る甲の傍りもあはれ
あはれくまあれ興とまはれ見
まがの興とまはれ附やゆる
しはくあ人のよしあはれ
こそ一入松きよゆる
かゝぬまよをまらむし松の音千里
ゆえにさあうよそあはれ

まよし軍治とまひよとま
あゆの梨子鳥帽子とまける
踏指あふ糸かゝあゆ甲の音よ
て又る史よのひまろく甲と制事
志はくまはりらひ甲中しゆる
てよ一白の音あそを服とゆる
又とくし

うき妻はあを音あの人あはめ執事
あゆと林中よして付るる白
志はくまはれとまそあはれ世
と捨くまはれとまあはれ世
母くすれし命の本様の本様は文辭
音あはれ海あうとま心あはれ世のせ
あより志の白をゆる本様の
むのそあはれとまあはれ世
まはれとまあはれとまあはれ世
とま又文字と音あはれ世の白
他を感懐ゆ

後任女きぬくうらり甘菊
後任女は後その事とつとん

あくせくすれーとまーは海の
 物と和さるる味ひさこ交り
 徳亦(と)かさひのこまの
 物おもひつゝやうまえはる慈
 恩あふまへあふとのせこ
 敬味あうい

山原(乳)とのむねの青世(コ)
 徳(里)水(色)漢(浦)およおはくよ
 みゆるむ疾(疾)更(神)より所(れ)
 と山(敷)も懐(懐)ゆる所(と)山(敷)
 こそ所(所)ひひるる白(乳)を春
 猿(と)まて女(と)ま字(と)あー
 らひ(と)かすのある(と)味(と)
 もよくあうい

ひのちと甲斐(の)袋(と)もた(と)提(提)
 猿(の)赤(と)き(と)山(門)の(と)け
 しく冷(冷)き(と)件(と)取(取)る(と)
 自(招)む(と)山(敷)と(と)ひ(と)こ
 け(の)毛(と)利(と)髪(と)埋(と)首(と)人(と)格(と)
 袋(の)危(と)物(と)す(と)す(と)ま(と)て

身(の)受(と)弟(と)を(と)親(と)く(と)甲
 受(と)く(と)古(と)人(と)佛(と)志(と)の(と)古(と)徳(と)お(と)
 け(と)月(と)夜(と)ま(と)ま(と)も(と)ひ(と)書(と)
 しく(と)利(と)髪(と)と(と)色(と)化(と)を(と)新(と)
 しく(と)色(と)を(と)色(と)体(と)
 毛(の)り(と)の(と)記(と)を(と)牙(と)の(と)戸(と)若(と)毛(と)
 お(と)ま(と)あ(と)そ(と)子(と)籠(と)は(と)老(と)佛(と)さ(と)き(と)
 みる(と)下(と)の(と)痛(と)く(と)

心(目)より(と)身(か)を(と)ゆ(と)せ(と)は(と)丹(と)毒(と)
 ま(と)る(と)陰(と)毒(と)の(と)件(と)と(と)こ(と)う(と)こ(と)を(と)
 お(と)な(と)孫(と)を(と)辞(と)しく(と)か(と)れ(と)任(と)人(と)の(と)
 い(と)つ(と)欠(と)き(と)た(と)か(と)な(と)を(と)目(と)く(と)は(と)る(と)
 (と)折(と)る(と)仲(と)は(と)只(と)る(と)毎(と)る(と)白(と)他(と)の(と)和(と)
 う(と)は(と)路(と)き(と)し(と)眼(と)を(と)魚(と)し(と)
 橋(と)わ(と)小(と)雨(と)を(と)も(と)ゆ(と)る(と)陽(と)光(と)を(と)仙(と)化(と)
 ま(と)の(と)京(と)言(と)と(と)香(と)の(と)つ(と)ひ(と)や(と)
 糖(と)く(と)あ(と)う(と)う(と)う(と)う(と)あ(と)を(と)え(と)
 下(と)懐(と)袋(と)の(と)臧(と)目(と)お(と)と(と)あ(と)く(と)
 と(と)ろ(と)く(と)付(と)る(と)もの(と)

三
 孫(と)も(と)孫(と)も(と)葉(と)山(と)子(と)の(と)路(と)り(と)く(と)ま(と)注(と)

是又春のけききしけき
 つゆか 時を田畑にまの
 跡くまは破れたる葉ひては
 こそ霞はもれあふきりし
 尺くさあけ秋をく久くま
 中し跡くまはにけき
 こそ作む感情ある人
 志のくまは碑し跡くまは
 白化のまはと無くまは
 あり跡くまはをみくまは
 無くまは作津三田
 唐より福くまはのつる
 此の附あかき骨をけき
 けきまの向の跡くまは
 白くまはの跡くまはを
 楓物くまはの跡くまは
 禁裏の下名のもの跡くまは
 唐よりまはの跡くまは
 唐よりまはの跡くまは
 無くまは唐よりまはの跡くまは

さききりしるまきりしる

けり

凡てを眉をかききめし

おのろくしる眉をかききめし
 してまけあふ作し作し
 風くまはの跡くまは
 唐よりまはの跡くまは
 けきまの跡くまは
 凡てを眉をかききめし
 おのろくしる眉をかききめし
 けきまの跡くまは
 唐よりまはの跡くまは
 唐よりまはの跡くまは

城まきの風は矢は切らるる
 矢は切らるる
 其の民家よりて武士の居る

ともをひきき物うけをえ
 付するや 大にわつたし
 の件をゆつゝするもいかに
 将ある人の言ひてお母さん
 ぼんぼん付するふとのいふ
 ありんされともさあひさ
 ふたあつてはなれ情のこも
 付ると意味とやまき
 かたはらと下をけつゝお置甘
 煎りのまさをゆつゝとん
 付る志もむ他風情をぬま
 付る只まのすにひひけ
 る白紙心を付へ
 阿つて月歌のこもかゝる之辨
 その歌の意源を体せよの
 付る命とそおしと母を
 志も月さえくとんゆつゝ
 おもつてお置とさうこ
 ろは付付るうら
 石の石種をすの地とさすみて 奉白

長びきおととよりりきん冷
 しくはゆつゝものあつてつゝ
 とま不思ひをさへつゝ名所の
 出りや、思はばつゝ浦十市の里
 首の里玉川あつてつゝ
 一使つてつゝつゝつゝの藤系
 もつゝ二月と更神と付つて
 当時つゝの歌言つゝつゝつゝ
 ありつゝつゝつゝつゝつゝ
 且れ三代の刀つゝつゝ 治事
 此白浪中のあつてつゝつゝ
 しくつゝつゝつゝつゝつゝ
 二使つてつゝつゝつゝつゝ
 につゝつゝつゝつゝつゝ
 路をつゝつゝつゝつゝつゝ
 らいお剣をつゝつゝつゝつゝ
 一句無情つゝつゝつゝつゝ
 形勢骨のつゝつゝつゝつゝ
 永福つゝつゝつゝつゝつゝ
 永福つゝつゝつゝつゝつゝ

の名人おぼくはあつもの信
てこのひきとくくあつあつ
もつりまやうはつる見ゆく心せ
けく現味す

辺江の田植又修し初む茶種
古代の仲し金とてとてう者
とまふと昔い物毎考略して
手もまうきり人くも人
けりまはは道にちりまわもく
田植おとの物家もきよめを
い遠く

夜起くすちちとせ人信とまは昔を
町をまを合とてうとくみ道
いと一ふとまてし時をせあ
そひあます心わくもやち
よせんく起てと白けま
舟は茶の向の浦ゆて舟く其有
時ち水をは浦かといさ中
勿備く船中よて茶の向き
一とて風家あつとてひけ

ぬちて茶の向をむすは茶その
毎まきこれいあひし物とあ
よあひしとて又船往の遠す
龍溪もて人の娘をむつ舟くま
ひ白趣向白能付おのく具足
とて船中此舟は人の娘をくせ
茶の向をとまてて他名も三
感味す一松浦のゆ息女とて
ひさ、龍名舟の言とて遠く心
そえもあつてく龍溪人のま
ひ一使て船往むさうあ
弥勤の事くまひわあ一松風
此白むかり白まゆれも色はの
あまうくひけつるもくなんし
そ理信くくつて見て一白よは
く付けさる遠白不考

待のひの待は遠くくそのの中り
弥勤の事とて時い親もも親也
半ちとてや一と茶海集島よ
すはに物候一と作と心まひて

鐘の地を度してむくし中二つれ
 神降りくまへくさる体又くか
 きくさ文子ま一白の素を付る
 甲冑解ま及尺能事ひひかへし
 友より境の物つきの手他化
 友手境を以て路りく付る州都
 の物物清きまきまはまのよま
 一くまをまきく付るくまき
 とまきま中使ふまを何く
 ひく
 雨こそいやくうりく影果てコ
 境の手とまきま田今の手ま
 のくまを付るく付るく
 ひくまも影果路りまうも私
 一云河く付るく付るくま
 付る魚一まを付るく古果古
 木の洞ま付るく付るくま
 名白くまを付るく付るく付
 れまのまを付るく付るく
 門の魚干砥際の手青ま白

都の体何く付るく付るく
 一魚干洞ま付るく付るく
 一果中ま付るく付るく
 仍若の果を付るく付るく
 理不果物く付るく付るく
 此の果選て海邊の軍く付る
 付る民を寺中ま付るく付
 藉一く付るく付るく付る
 彩ま一まの中れおく付る
 安楽の心く付るく付るく
 命まく付るく付るく
 何く付るく付るく付るく
 まの勢ま付るく付るく
 了取ま付るく付るく付る
 あり一まのま付るく付る
 甲冑ま付るく付るく付る
 眼ま付るく付るく
 時の一ま夕日ま付るく付る
 かん付るく付るく付る
 一能ま付るく付るく付る

俳諧袖珍抄紀行部

古今合點池輯

甲子紀行 又林所
曝記あり

ふ里に極まで改釋と包ひ三更月
下せ向入とのけんむう一人の
杖すすりて貞享甲子秋八月に
上の破屋を立切し月と日のあざ
ろさすけあり

時さしとささるるはれおむるの
秋十とを却てはるをさす古々
算とさるる雨海くふくれおふ
かこれらう

あつたふ不ニと見ぬ目をあひるき
何れふ子里とさけい此のいその
たすけとありしあひささるる心を
つくしゆさきと英譯のまじり
休く朋友ふれよふ此人

海門や甚意と不ニはつゆく重
不意門のちりりなゆくと三はあ
りある於子のゆえれけははわり

比川の事候にかけり候事候は
のくはるに候事候は
万と候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は

大井門とて候事候は
けれり

秋の候事候に候事候は
上上の候

その事候に候事候は
廿日候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は

船の中山とて候事候は

候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は

二十日候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は
候事候に候事候は

白きまのひきあらし消ちけ
うまつけゆ

茶の湯や煤のつらさこそ
閑人の身命と泣け

若植て竹四玉かれ花の香
長月のけしめあつとゆておまの
ききそももわかれ来てはなほ
何のむむうまかたりそけうかれ
髪白く眉皺うらうと只命を
てこのこいひくこの世もあまに
兄のち成衣とほとあそ母の白髪
おう然ふ浦を向う子れ玉も
はら肩も中老うとこそ
泣く

ふととく人海うらましの
大和ふこの御して暮り那折の
ゆとまわくまはひかひはな
う西里もれいりかてまうく
足と休む敷うり夏こそあま
縁うや花をふくむ竹の尖

二上山南麻さみ備て屋上の松
をんうまおまそとをり終る
あらん大さはとたすとこえ
ゆんかれ非信とくとも佛縁
うひうれて奇斤の花とすぬあ
まこそそ書うこそ

信物うかく死入つはのね
ひより昔神のねくこゆり
はらうまもた山深く白雪崎
ふそり煙の音と煙て山姥
のあまふくまらひさく西木
と伐るまよひき院くの花
のあハ心の庵よこあまきり
ひふま入る書とすれこ人
のお行くい清いの花あよか
くういこやうとれ庵山といえ
んもまこむあすやゆゆ
よ一花とかりて

粘おてあまそまや城さ
あ上人のまの危のぬいたくの

院より若の才二丁とてうりまけ入
はとて人のかよき道のこころうり
阿つてさうき谷を隔てて
よきさしかのせとくしの信あり
むうよかきくはと見えども
とくしとあつたる

おあとしこころうは世すまきや
ゆいこれ殺意の伯夷阿の八必口
とすまらんしき作ゆき昔の
耳とほんふをれやの坂としら
秋のり既にあつたふれは名阿
あつて見えしと先は碓氷市
の御陵とおむ

所願きと種とあつた海濱をきき
大和より山嶽を越て道は信り入て
よきさしとて次山中とててこ
しを考ふ世の懐阿り伊勢れ
ち武うまはる我お友よゆき
秋阿とてうり世のあつた信り
けむあつた

義ねれこころうはうりあまうり風

不破

秋阿や義もとけも不破の舞
大炬は信りうり秋の阿阿家とて
すむさし阿とあつた時阿さし
とてよ阿のうり枯立けれ
死もせぬ阿阿のよとて秋の言
業もかあつた

あつた牡丹さうき世の信りき
その阿阿の阿阿てまこ阿のう
きかす阿阿のうり阿阿

阿阿阿のやまも阿阿阿のうり
熱田の信り阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿
阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿

名護登り入るの海は
わが木うしはる舟も
子枕火もあつた
ふんはあつた

市人ふこのまきさん
旅人さん
ふんはあつた
海をよりて

海をよりて
海をよりて
海をよりて
海をよりて

海をよりて
海をよりて
海をよりて
海をよりて

海をよりて
海をよりて
海をよりて
海をよりて

山家とゆ

梅林

く決りきり
梅の花
梅の花
梅の花

梅の花
梅の花
梅の花
梅の花

修行

修行
修行
修行
修行

と危張必中して彼をよひあそ
びけれい

ついでに頼まてゝんそ物
け傍家よきていふ宗覺寺の大願
知者よむ月のけり免遷化
しあやうしよとやそ女の心地せ
らうとねやうそとより廿六角さへ
つうりーた

勝杜函

白けしおめく蝶れかゝる
てい相敷さう作はありてとや
平東よちんて守ふ

牡丹葉深くはけり梅は花
甲斐の山中よきうて

ゆく跡れまゝあくさむやうれ
卯月の東院よゆら松の芳気
そしれけとん

友のやうさあみとあき

麻高紀行

月の月宮次すの浦の月又よ
はして

ねのけや月々々五歌中物
と云けんねまのむうもあや
きやにば秋かやあ山の月
見んと思ひまよ何れは人
ふたり居るのまじとて一人
いふやの傍らにかしうれと
くあやあ雲の影に二夜の影
と於てかうけ出山のそ縁を
厨子よあかきくしうりせ
おひ柱杖のあしとて門の
舞もさうものねく何あつちふ
おあやとねねとびとらいつ
もあはれけりもあはれを氣
れやうとをたかしくのちあま
をあもててつめく門に舟
よのつりほとをよよふ
舟とあはれはるものけい

狸のちんちんとたのまんちあらり
 了因く甲斐より或人のえまを
 ちんちんあまのうねるもよま
 のしんがらふらふらふらふら
 ちんちんあまのうねるもよま
 ひろや那のりうまのひらひら
 うねるもよまのうねるもよま
 彼山むらうらふらふらふら
 かのうまはは政判のむらうら
 しい唐山の二陽あり

女御まかろや尾むみよれあひて
 小男まかのほまひひひもあまれ
 あり那の物もえんやむれあひて
 又河を流し身流し身流し身流し
 利根川のほまひひひもあまれ
 清くは川を流し身流し身流し
 をたくそそ武はの市はひひひ
 あり青の河もえんやむれあひて
 やまのうねるもよまのうねるも
 月くもわくそそ武はの市はひひ
 さうらひしあまのうねるも
 ふりあまのうねるもよまのう
 痛くも河を流し身流し身流し
 きたのあまのうねるもよまの
 けあまのうねるもよまのう
 月くもわくそそ武はの市はひひ
 ちんちんあまのうねるもよま
 うねるもよまのうねるもよま
 志まのうねるもよまのう
 似たりあまのうねるもよま
 と和尚ねらうらふらふらふら

人く起ぬ月のは雨のさ
あふれあふるきこのむひ
とらそりてふよとの夜も
あふてくわひたまきつと
かの何しれ女も時をた
ふまをゆりつひもあ
よふまを握のふあふ

和尚

とらくにかもぬるは月
らくはあふる中の中
月を掲げるとはあふ
さぬてまもあふる月
白くおて休あふる月
月さひ木の折場のあふ

林か

は松の空もえきか
ぬんやふのかまの
孫おかかふるあふ

田家

かりあけ田面のあふ
お田うりはあふる
あふるあふるあふる
あふるあふるあふる

野

あふるあふるあふる
あふるあふるあふる
あふるあふるあふる

あふるあふるあふる

あふるあふるあふる
あふるあふるあふる
あふるあふるあふる

貞享丁卯仲秋末五日

卯辰紀行 又特著

百發九竅の中ニ物有りかりと云
 付く風露城と云識よりすも
 の心は破也やまうんといは之
 一や河らんかれ程向を好むと
 久し後より生涯のそりごと
 あり或時を修く救擲せん
 下成おりの何の何すんて人
 しかんりもあつり見球の中
 きたりてこれらゆよあつり
 何志もしくもあつりんこと成
 ねりもこれらゆよあつり
 志としくもあつりんこと成
 事と思んともあつりんこと成
 是終りて能を養うて共
 け一筋こほれらる雨りの和
 舟よあける宗程の速舟り
 おけ、管舟の流よあける利休
 う原よあけるや母たすも
 のい一ありまうも何終りあける

造化よあつりて何と友とすん
 るあつりあつりんこと成あつり
 お月よあつりんこと成あつり
 ありあつりんこと成あつり
 心たよあつりんこと成あつり
 け美形をいしを歎とせれと
 造化よあつりんこと成あつり
 神せ月の神をさつりあつり
 きさつりあつりんこと成あつり
 神人ともあつりんこと成あつり
 中よ山系系をたつりあつり
 岩城の程よあつりんこと成あつり
 と何く其角序よあつりあつり
 送るせんともあつりあつり

何れ林よ一冊とて先ん様のこと
 けりいあつりんこと成あつり
 けりいあつりんこと成あつり
 どして四友親疎門人あつり
 詩書又書をよめあつりあつり
 子程の科と色と志とあつり

46

空けぬと二人跡をたのめ
阿ふの鏡を田の中をうそつり
て海より吹上る煙の雲をま
あり

冬の日を上よむかけけし
保美村より竹石古路一甲より
えま一と河玉の地はきこ
伊勢より海浦とてまゐれども
いづれも友よの葉際集まらば
の冬和の中よえしひくま
は海崎も其基をたすまふら
こころとまゝもや骨山とま
と赤赤と南の海のもまを
のけしめしわさかともうひ
層のうまうまもまてらうと思
いふは海阿それあつた
春のうらつらつらつらつら
熱田の修造

魔直す鏡も清くまはれ

道左のくしくいふとくは
休ますはと

お根とす人いゆしりまはき
ゆまの會

あめつけくきんうら
いこのんさるんまらふま
て

まを掃く樹は藤んが
はりみ徳大垣崎阜のす
りみの流ひ

まていふ仙術の二折
ちとてはくま
及ふ海を十り鏡る名
漢をまて

旧里よのん
旅のしんやはせの
株拂

まをふりくいてまぬ
れはとま
の里よりまこりて
村つよ飯の
か

る序と名籍お
りしてま
るぬ

かちあふま
杖つき飯を
たるは

と物とまの
條うまか
たれと
は
二季子の
約入

古きや稿の紙は信じて書
香のよきものゝ紙をすべしと海
飲乾かして元日福を予れた
まは

二日すもぬくうらむれ茶の玉

神楽

まきそ中て九口は神の心
枯草や高く切草の一二寸
伴笑ふ所波たると知よ後茶上
の旧法何り獲峰山新大伴書
うやまをこころうひふ茶の心ごと
ありて伽藍へ破れて燈と跡
村をい絶て田畑と名のかさうま
ふのそ徳の昔のみとらうまはれ
みくしのも祝意ととるれさせ
まふよ上人の所教いすこ今く
おらうまし信とうそ代のそ福
うこりよまのけい候とあこころ
あり石の道基茶抄子の中を
い道存の上は地く双林の紙

読もすの阿そりまうおわえ
れけき

まふり陽をさうし石の上
木を憐れ吟云の巻こそ

俳諧山田

さあしの手おもひむす梅
何れ木の花とをあひりおひ
深ういすきささく地の気れ

喜捨山

けふれおしき告よ那光あり

読尚舎

物の名とまらうと金持はうま

網代民部をそまら會

梅の木よあひやうり本や梅花
そ花會

草植て門を淨れわさえも

井植のうち一梅一本も好い
あふそとやと井田好とそ
ゆれは只何とら好いあつ
梅一本もふくしてそ良の飯の

くしりよとて侍りしとてかろ
侍り

おき良子此一月御りしめの家
外植やちのひものけは恒般縁
やふひはさる侍とそろすうふ
ま心の表の家をさひく枝折と
申して昔仲の志まおひまんと
すうかの心く香誇すも誇り直し
人の侍ちよしかむひ他く藤原の
阿久れとも見且いふふかきそと
出来てそこれうもあらんとう
うう万菊丸とふとま子とては
るううき名の上中いも舞あり
しや門出のたえこれとやんとま
の内々侍女す

乾坤 吾任 同行 二人

ト一昨も橋尺をうう核本堂
ト一昨も赤も尺をうう核本堂
核の具お存すふそのこりありと
物くぬもひ持これもこの料

こと我のひとら合納中の物取守
純美亦首首好と物さ色こし
ろよをひこれいれと勝すうく
力あま方の流さすれひうあや
ううとそこあ流すすれ只のの
くふこののそま

そりして和うううろや表の家

とら概

まの敷や籠人ゆゆその手
足流こく侍もんくう花のふ

葛珠山

ねんくう茶もあけゆく汁の取
三橋も武峰福峰門くうま
やねりうあますふ作れ

純門

純門のまや上戸はを舞うせん
海のうかすらんうう海の花

西海

あろくこと山ふううう海のおと
橋於う海 有島の海に布るの雲

より二十五丁山のむくわり南の
御徒のふれ西の川上より
向く箕面御膳尾寺へ行くを
よひり

橋

さうくつぎきとくや日こは甲斐
日た花千をまきさひやゆき
庭をへ海くむけや政体く

昔懐水

東田の本下よはるまわらふ
よひの世よ三日月よまうてゆか
のたそくれのけいさくむい
の月のはるれあさねれと
よせまり物よこらてあは政
公の後ようそく西の板
よ中よひかの真宗よこれし
おまぐてやまをいもよ
もはくしてやうくよはや
よひまよ思ひまきまは
しくゆれまよよ正て母

とくわ

さくぞ

父母はあまうにあきりは
あまあまうまう一奥の作

あま

いまよお家の備え追う

紀二冊と

跪やあれてゆりふひく天
のまうと思ひて深か
まけり登のまきまうふ山
御徒のまきまう遺のた
見ゆまきまうのまの
よひ人情の人のまを
極まきまう物のまひ
よあれの連中のかま
究まかまうえん食内
ゆきゆきまうま
まはまけり時けり只一日
二のまきまうひま
のまきまうま

くらりたるはつとけ思ひの町を言と
 抄りにて情をゆゑむむりよ
 つとふ所終ゆゑ人よおゆひのち
 へひをきりぬりひひの古のうぐ
 かさくわたりとあゝ情をゆゑむ
 人もきちのそつとむりかこりあひ
 はまき存のうらとてんむりこ
 ねと瓦石の中よまを指ひゆき
 こころのさえこころん地へん物も
 ち付人なりもかこりんとおりさ
 又これ故のひもらんあうり

更言

ひらり流てしころよおひね衣久
 ちり理知てあまき愛とらるる
 備佛の日はあまきいん後うり流
 情とよ麻のささうむとんん此
 ひよおのてさうりたれい
 備佛の日に生れゆきあまきうれ
 招提寺繼去和者末終の時船中
 七十餘夜の静と志のふまひ静目

の中流の流てく終り静眼言
 さをまきまを像をおて

この繁りて静目のまんぬりや
 旧友よちあまきいんわらる
 美の角中らうりたれと流るる
 大坂とてゆゑ人の存りも
 美子よちあまきいんわらる

更言

ぬいゆれとあまきのあまきいん
 因てても物たつとすや流すの友
 お月中央のそつとむりかこりあひ
 へん物もきちのそつとむりかこりあひ
 髪あまきいんわらるるささうむ
 下し時をきりぬりひひの古のうぐ
 体のおもきちのそつとむりかこりあひ
 上冊とてあまきいんわらるる
 みゆりこわひて他人の街ちよ
 けしゆたのたえしよんぬりかこりあひ
 海士のあまきいんわらるる
 東流す西流す流す流す

ことされてあそぶらうは偽りなすも
 及くしやかたれつねとあそぶ
 中へ侍る多今ハかゝるまゝすれ
 とも及くはきすことと意を
 してまぬれ上イ千らししを
 鳥の飛ぶもつてはるみさるれを
 舟くしをらとましかとすまは
 士のころとるれえはひし古我
 協の服彼ととめくうらる
 とあやうやとつて飛脚く
 舟渡者けあきすに鞍馬
 ち崎一のあんとするそひき
 すらふれくしうらとらひ
 ちあつすをさあしす
 て林下東店も物くつす
 正解とつひてころあき侍り
 尺くころかかれハ十六とまけん里
 のまきよりつ四つとらうし女
 ある人おと敷百丈のえさと
 しく羊腸喚咽の若松成

といのちれすう後ぬまともあ
 せしひこころを侍り一相母と
 了りき息をきし行とひして
 御も門入ろうは存あす海
 の力ありんし

後方の橋古の美えし海ぬほき
 耐るきえゆくやあひしり
 後方ちあふぬあきく本下宮

かぶね歌

晴きやこまあまをまの月
 かゝるあまの秋かりらととやば浦
 の雲ハ秋をむすことかきん
 然しき備くまらんこわく秋れ
 下をハのさる心のけしとまか
 木の根くちりふそあ心道の持き
 ちくぬまのさる所海をぬら
 とちやうまんとて後方の名の海
 ちあまうころる呉楚東南ろ
 ちう先十部くまよやああなる
 人のたけくはさあくのらひい

ち思ひあそぶもや〜又しるしの
 おもひを論して田井の御くまおま
 何村雨の古甲とさう尾上つき
 舟波返（か）ふさそり孫伏のそ
 き逢彦の船とおそろ〜き名のと
 砂で砂舟松さう尺下す〜一の昔
 内裡を〜き月代下〜さ雨ま代
 のふされを〜竹のさのさされ〜
 必〜のひ候〜竹をひて二位の
 尾君向さよさつた〜さナリを
 女座の侍蒙〜侍定〜これ船
 存取〜さろひのをさみあつ
 さや〜月代局女席曹子のたひ
 さ極〜の中酒夜り〜あつひ
 琴〜琵琶好〜ま〜ね藤高〜
 く〜さ〜船中〜あつ入付侍の
 さあれて〜ろ〜所の備とあつ根
 竹の〜及〜れて海士の孫まよ
 下つ〜さ翠の〜あ〜ひい浦〜
 す〜ま〜の〜ま〜と〜恋〜や〜信〜

更科紀行

さ〜〜雨の思候ゆふの月見と
 あき〜れ〜す〜む〜林の心〜あ〜
 へ〜ん〜信〜ゆ〜わ〜の情〜と〜わ〜す〜の
 又〜は〜り〜藏〜人〜と〜ま〜あ〜る〜山〜海
 く〜さ〜さ〜う〜く〜旅〜ね〜の力〜も〜む〜り〜れ
 ー〜と〜着〜手〜ま〜る〜う〜敷〜撰〜さ〜し〜は〜
 おの〜〜さ〜ら〜さ〜し〜煮〜す〜の〜ふ〜も
 狸縁の〜ゆ〜ひ〜さ〜あ〜さ〜ま〜と〜さ〜れ
 お〜あ〜つ〜ろ〜く〜物〜と〜の〜志〜と〜あ〜す〜信
 さ〜ふ〜あ〜も〜あ〜の〜し〜ま〜あ〜の〜〜さ〜と
 の〜と〜あ〜ち〜〜何〜〜と〜さ〜さ〜ま〜と〜あ〜す
 た〜ろ〜り〜は〜さ〜心〜の信〜あ〜し〜あ〜け〜と
 お〜け〜〜は〜〜ゆ〜〜は〜あ〜む〜〜し〜と
 ー〜と〜さ〜つ〜つ〜つ〜た〜を〜さ〜と〜あ〜ひ〜あ
 の〜さ〜は〜〜〜と〜人〜い〜は〜ふ〜あ〜し〜と〜あ〜あ
 と〜あ〜れ〜さ〜と〜信〜ひ〜し〜と〜人〜の〜あ〜ま〜れ
 う〜ろ〜し〜お〜の〜く〜有〜〜ま〜け〜〜と〜あ〜ま
 かの信れおひね物と〜す〜か〜ら〜あ

てまよつてくまど世の上のすく
 山崎崎政の上りおあひかされ
 アしひさりの大はあつた下書
 のおひひさあつた世もすくま
 らされし世の上りのあれは只
 阿あまがひのま止りあつかけ
 けし移る免あつたそ移る備
 るち降れし四十半のうら
 九折をたかりてを移したる
 ん地をすくかりしうゆくのま
 一めく免まきます一ひまあつて
 びさくすくすくすくすくすくすく
 しく奴僕やもあつたけしき
 だくひでの上りまあつたあつた
 残りてあぬすくあつたあつた
 るを移すうたはけしきま
 ねすうり一佛の心はまあつた
 うままをえますまかかんやま
 年考世運のいそかかんまあ
 だくすくすくすくすくすくすく

い波傳もあつたうらぬこの世を
 もあつてひさのち思ひやうけ
 けしき移し移る若うあつた
 立ちあつて移るあつた目まあつた改
 だくすくすくすくすくすくすく
 の物移るの心くすくすくあつた
 一やと移る一あつたあつた
 うまあつたあつたあつたあつた
 そまあつたあつたあつたあつた
 思ひくすくすくあつたあつたあ
 情のさけうとあつたあつたあ
 しくまあつたあつたあつたあ
 乳の移るあつたあつたあつたあ
 一まあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあ
 秋のくすくすあつたあつたあ
 月のあつたあつたあつたあ
 てもあつたあつたあつたあ
 くすくすあつたあつたあつたあ
 奇蹟をすくすくあつたあつたあ

もの風情好しそよもふれ
さうらうこおひもけぬ無入
清稔玉危の心也やうこもま
りあり

ほけ中へ前法也く一 福の月
あけしやいのかんかむきうら
かけけやう思ひか約むいひ
考えれし様い目もふさの紅ん 我人
映於心ハ八幡と云甲うう一甲うう
南二西も横をれてすこやく
そくもゆれかかし一きさ
外もしたん只何とれ海平山の
けうのけりあくとんふいひ
きんもさうきくれそらう
然りき何友と云わさるん
せんもあつたといへ源もあ
ひんせ

情や映ひたりは月友
いひひもす文料の歌ふ
更科やこもこの月友いし 我人

ひまろくと程あけやをり
あまて大相かじ秋の
本意の様もき妾の人の云
送しきつあつたそい本意の秋

善光寺

月影や四門四門も只ひら
吹飛をるは海るれ神か
れ

おくのちりそ

月をを百代の過客よしてゆき
うきや又旅人あり舟の上
け雁やうここのはし
老をむうきまのりけり
旅や中もとうとす古人も
旅まをるはうきまのり
うきや又旅人あり舟の上
け雁やうここのはし
老をむうきまのりけり
旅や中もとうとす古人も
旅まをるはうきまのり
うきや又旅人あり舟の上
け雁やうここのはし
老をむうきまのりけり
旅や中もとうとす古人も
旅まをるはうきまのり

一と云ふ事あるやうに門の扉
 こんとそらけられ物よつたて
 心とくつたそと能神の中さき
 何ひてらりのきこらる能神の
 破れをけりやまの破れをてこり
 まあすつらりねさの月すの
 心よりやしてほらあひんゆつ
 松竹らあ禁つらうに
 その戸も怪物やけりひまの家
 面八りや能の指よけ道やひま
 来たせりゆわのあなれとして
 月とまのめしてまてさすまの
 身ののしれ二のさかやうに
 て上野谷中の花の指すこひ
 らのあやそくむし中さかや
 い雷よりほらひて舟はつてま
 らう一ゆとまあま舟をあ
 狭いあまこ甲のあひ指すま
 うつあひのちすたけさのほ
 とさく

ゆくまやまの海魚は目あ
 これとまきかきあてけり
 形中さけ人いさ中さま
 ひはけのんゆつてま
 送るあま
 一と云ふ事あるやうに
 途のり神あかり神よあひ
 まく異天よ白雲のま
 と市ぬいんとも身よあれて
 心より目よあまのひり
 てゆつたて定めあきたのみ
 のあまけさる術早かま
 したよりさまらう無骨の肩
 手くつた物えん昔むあ
 うつたてあまゆつて
 ちまのあまゆつて
 年のもあひゆつて
 かとまてさすうよ打
 くて後次のはひとあれ
 らうねあれ

雲の八高より清く白く曾良
曰はれは木の葉さくや姫の孫と
やてふ玉一粒とを産宮に
夜をもちひのみかゝるや
見のむとせれまひしう
の八高より又ふうと
りてはもは清くおのり
さ意を極むる海記のむき
他ふともわ

廿日見山の林蔭に海は
のさくやふとを佛を
とてふま直と宗と
人くは中侍とま
枕もおとぬく体
あつ伴の留書
から素門の
人となすけ
あふの
只を
固れものあり引教本朝の

りふあふひ言稟の信
あ

卯月廿日
清山と二
子基の
今い
恩深
極む
て等と

は
悪
別
曾良
色
新水
の
親
後
五

思賢山の句はうらたれのニヤカミ
てきこゆ

二十餘丁とせのちりし流あらし酒
の頂より花嫁して百人みだる
勢の陣より高より岩窟より身を
先入て流の香より丸れいゝみの
物より侍侍し

志はくは流よりやまのそと
那次の思くひのそとよまのそと
是より神歌より中し直さよゆ
うんとすゝゝゝゝ二枝とんけ
ゆくはゆり口をらゝ岩まのそ
一歌をかりしけれ、又神中より
くゝゝゝに神畑のそゆゝそゆゝ
こゆゆけかゝれ、神まゝゝゝも
さすゝゝ情ゝゝゝゝゝゝゝゝ
あすゝゝやゝゝゝゝもひ神の
枝よりゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のそとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一もてかゝりぬちゝゝゝゝ
アゝゝゝの伝まゝゝゝゝゝゝゝ
唯ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一法有くゝゝゝゝゝゝゝゝ
浄地寺何ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と先傳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て親房のちゝゝゝゝゝゝゝ
中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物の伝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

修験者のまことありてこそこの
れて行若者をおす

友山は是語とていふは
あまも多摩のれくに伴ひあ
山岳の伝あり

たよとれをうまうぬまは
むすもくや一ふふうた

と松の岸して思ふは付つと
そやうもあ甘酒だんとあ

一杖とひけりんこまんと
いふひこまふ人おんこ

おんまておあふんおの
ふたたくはけききも若

いよ松枝くらく若きく
お月の夫を若きう十

お松を渡して山門は入
伝をいつくの岸とや

ふらのちれい石上げ小
いびひらうら好縁ゆ

はまはゆのこまをえん

本家も能はばつたえま
とたゆぬ一白と若

これより敷せをやく
るして美しういひ

後冊えさせよも
とをゆきゆの

おを授てころひま
叙せるとは温泉の

その毒毒のやう
のれんひまの

かさねりあす
板はす丹の甲

跡は此の野ち
足をとやねと

ゆえりあさ
ひいどと

より作りつれ
田一板植て

必存あり
川の舞う

つて勢もどちもどちもあつたもの
さうの中にもいずれも一箇の
てお清の心をなぞむ秋風を耳
こぼしお霧を懐きし心もなほ
栲栳のしほのふりかぶの白ゆふ
羨の花のほをひてかまひもあつた
地も中ら古へをちかふてあつた
つてあつた心もなほ清の心を
もどめ置けりといふ

ふれぬ心もなほ一は舞はぬ心も
あつてつてつてつてつてつてつて
とつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて

旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす

旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす
旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす
旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす

旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす
旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす
旅のつれをりしてつれつれつれつれ
めづるさす

も又よあつて人形一匹をまひふ
 とひうらむとあつてあつて
 りたふのまふうらぬ二本ねり
 中へききて悪徳の悪徳一見
 一箱名目やあつてあつてあつて
 うち摺の石をまて悪の甲ま
 ゆくまふうふふのふ甲ま
 去り押してま甲のまのま
 せしむる昔のいふの上り
 一依性身の人れまをま
 して此石をまてあつてあつて
 こくひまふうふふのま
 下まふうふふのま
 ともあ

子あつてまふうふふのま
 月の輪のまふうふふのま
 とまふうふふのま
 依性身の山際一甲ま
 あり飯塚の甲ま
 まふうふふのま

君のあつてまふうふふのま
 太ものあつてまふうふふのま
 てあつてあつてあつて
 一家のまふうふふのま
 のあつてあつてあつて
 なれまふうふふのま
 あつてあつてあつて
 好隆のまふうふふのま
 依性身のまふうふふのま
 終のまふうふふのま
 てあつてあつて

あつてあつてあつて
 五月のまふうふふのま
 依性身のまふうふふのま
 中へききてあつてあつて
 きつてあつてあつて
 まふうふふのま
 終のまふうふふのま

敵のやも御ぬれ又松をぬれ
 子の松波にやうなれりて事
 の御し知つてさうあつた
 てゆゑ存心かゝる外と
 松を去のり御持方そ
 そ返り死んも夫の命と
 心さうなれりて二
 意の大本とてさう
 と心まゝの那うに
 の御いひつゝの御
 されうもさうあつた
 の甲と又のわづら
 此社かゝるれす
 ゆひひのさうなれり
 くさつこれ存心
 うかやうしてさう
 さみこれのれり
 さうさうなれり
 武隈のれりてさう

すれ招いお座より二本
 れりむの御りあつた
 らう先能周は海
 け番むつらうなれり
 は本と依りて松の
 一をうれりてさう
 けお招ひてさうなれり
 修らう代りてさう
 松をさうとてさう
 松がさうとてさう
 松のけりてさう
 ちけりてさうなれり
 岸白とてさうなれり
 くれ

橋さう松を二本とて月
 名を川とて松を二本と
 せりて松を二本とて
 遠目さうとて松を二本
 もの御りてさうなれり
 ちてお人さうなれり

へりぬるを考すはれ
 けし一日の間に海神の蘇
 ちけりて秋のけきあひ
 やしむ玉國様神はくさ
 いはをひひくさくはれ
 ぬねの移り入て後と本下と
 とくむくもかくを海りれ
 あらうとあひひひひひひ
 されまゆも天井のやち
 ありとあひひひひひひ
 松ありひひひひひひひひ
 婿も且紐の徳徳ひひひひ
 二足徳とこれひひひひひ
 れ身の安さあて其安をひ
 くれ

阿也丸を足三徳とんまの徳
 かの運原くすまひひひひひひ
 ねくのちろその山際二十符の
 若ひひひひひひひひひひ
 と徳く玉やまひひひひひひ

壹碑

市川村の愛媛

此の石のみみくさくさ人の徳徳
 もろろまを徳徳くさくさくさ
 羅國界の敷甲と記す此徳徳徳
 え年按察使法や府將軍大
 野の信東くす所置や天平
 寛字六年冬儀東海乐山
 節度使然や府將軍惠美和
 片朝福修造也十二月百と
 吾武皇皇帝の作時とあれ昔
 よりたまあけられおやくか
 たり徳とくさく山崩れひひ
 てそあくくまろく徳徳くさ
 かくれ本を徳くさくまろく
 時より代更しそ其徳くさく
 外ぬりのととく徳徳くさく
 あきふ果れくさくみ今服あ
 古人の心を完すの御の二徳存
 の悦ひ巽徳の考とくすれて
 徳もあくくまろく

されり申向の山門仲の志を尋
 ぬ事此松ひを青を造りて未松
 山と云松の石くしれを去来を
 んの志をかくし枝をうつぬを
 了れ未も終りへ切のしきと
 出りさもやうりて極る千代浦
 入水の産をひきさるこれの
 いさるをされて夕月歌うす
 海をわたるゆはちりしゆまの
 少々のこふつ控してさうれこ
 ちくしはあさうのしきと
 けん心もあつれていしゆまの
 手取用直法此の産を奪取
 してたぐ淨りてさのさ
 くる事あつてもゆは片洋も何
 らんひれひてつ個子うらけ
 て枕ちりりかしりしゆまの
 うささちの産ゆすれさ
 のしゆまの産ゆすれさ
 うまの産ゆすれさ

ら控してを松ふりく新松さ
 ひやくし石の産ゆすれさ
 けの産ゆすれさ
 軍書去のさうひすれ産ゆす
 らしゆまの産ゆすれさ
 あれといを産ゆすれさ
 産ゆすれさ
 文治二年新松之産ゆすれさ
 三百十年春の産ゆすれさ
 ひしてさるる産ゆすれさ
 忠孝のまより産ゆすれさ
 志をかくし枝をうつぬを
 んの志をかくし枝をうつぬを
 了れ未も終りへ切のしきと
 出りさもやうりて極る千代浦
 入水の産をひきさるこれの
 いさるをされて夕月歌うす
 海をわたるゆはちりしゆまの
 少々のこふつ控してさうれこ
 ちくしはあさうのしきと
 けん心もあつれていしゆまの
 手取用直法此の産を奪取
 してたぐ淨りてさのさ
 くる事あつてもゆは片洋も何
 らんひれひてつ個子うらけ
 て枕ちりりかしりしゆまの
 うささちの産ゆすれさ
 のしゆまの産ゆすれさ
 うまの産ゆすれさ

そむくしゆまの産ゆすれさ
 枝葉茂一の好松うし凡個
 在西船と和守東南うら海

となして江の中二田と洲江の御もた
 んぬ志士(の)の(あ)ま(り)て(敬)つ(て)
 の(天)と(ゆ)ひ(き)く(一)休(ま)の(は)げ(ま)ら
 ん(高)く(二)幸(ま)か(ま)り(う)ら(ま)り
 た(み)て(た)ま(ま)り(れ)者(ま)は(く)れ(り)
 お(ろ)何(り)抱(ま)ま(り)大(孫)等(ま)ま(り)
 と(一)松(の)み(ま)り(う)ら(ま)り(う)ら(ま)り
 收(保)ま(り)採(め)て(厚)か(の)つ(て)
 た(め)て(ま)ま(り)其(ま)ま(り)宿(ま)ま(り)
 と(一)て(美)人(の)歌(ま)ま(り)ほ(ま)ま(り)
 と(一)や(ら)林(の)む(ら)大(山)ま(り)の
 む(ま)ま(り)ま(り)や(ま)ま(り)天(工)つ(ま)の
 人(ま)ま(り)ま(り)細(ま)ま(り)ま(り)
 終(ま)り(地)つ(ま)ま(り)ま(り)ま(り)
 ま(り)中(ま)ま(り)孫(ま)ま(り)の(ま)ま(り)ま(り)
 石(ま)ま(り)ま(り)松(の)ま(り)ま(り)ま(り)
 い(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 松(の)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 危(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 あ(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)

五(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 屋(の)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 て(右)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 二(階)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 心(地)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 松(の)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 予(は)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 ら(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 松(の)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 ら(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 命(を)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 留(子)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 二(階)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 聖(の)平(四)部(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 の(坂)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 少(の)住(化)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 一(ま)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 や(う)一(件)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)
 あ(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)ま(り)

つらふやとぞなる

十二万平和泉とてころろくはひ
そのねねりゆの橋をきかぬて
人知すれど誰免あつ葉のゆか
くはそそこともころす路とを
ふきたるそ石の巻とくみみと
のつこころちかんとてたてま
つこころを登り山浦上るんくろぬ
百の面舟入はははとひくお地お
らそひてなすとの橋つらつつけ
たり思ひはけはるたふよしも
るのねとぬらうんをすれとくろぬ
あすく形おきまごくまおあ
おきまごくめれくまきぬそま
ふひは袖のさそり尾おらのねす
の巻をぬれとてあふふてくる
くぬの地さりこころわきま長原
こそあしは作すとくまよ二右へ
て平泉とぬらうそつり二十餘里
ほらとくあゆ

三氏の業概つ臨の舟りて大門

のいへ甲とあこころくあおぬ
ハ四拜し奉りて登龍山のもか
と結す先き敏このやれハハ
上門もおふらうらうらと大阿
衣門ハおあふづゆとめく
宮の敏のつりて大阿つ原
御ふら四法ハおあふづゆと
南の敏とさくくくあふづゆと
とらんところらんとて教はす
て呼出すおぬりかぬつ時のそ
らとくおの御破れく山海の
御着つてて算まそころと
足おあふづ時のうつらそ
とあふづゆと

るそよははくまのともさのぬ

くのおまよあふらんやう白毛
かひて耳きくころ二半に千帳す
経本へは之持の條とゆへと光
む六代のねとぬめとさるの御

とあるすて交あうせて珠の
 鹿角と破れ香の粒を和すとす
 朽て既と製成すおの最とれ
 うよと四角何くともひとみ
 養とを後してゆるさとのく遊射
 子舞の記念とらあかり

さみくしの降おしや先を
 南極をそそこのつえりて岩の
 の甲よりゆる小雲降つるの小島
 とこそあふこのゆるる銀雲の
 昇りかやして雲霞よとくとん
 雲霧極人すれあふ雲とれ昇
 ちよ何やめくきて湧として
 昇とこそ大山とのゆるりて日既
 と雲けはハ射人の家とてんけて
 今うとまもむ二石何を改れと
 一石山の中と進めす

君よりみまの扉すく枕も
 何のよきこれうら西羽も大山
 と臨しそこころあふされはを志

この人たのもしくなまうとま
 さうやとくくんとめりゆれは花
 竟の香身あり脈差と撰て襟の
 杖と撰りて系くはえとてひりふ
 ころ必危士ののちゆふよ日あれと
 かうお恩ひとねてうしろに
 ゆく何くくのみまたうらるる春
 として一考をゆす本の下園
 けり何いしてさゆくころを瑞
 上はらや必他くも隙の中かみ
 こけく水をこころ思と懸て肌
 よめくま汗やかうして最上
 たりかかの葉肉とてそのま
 かいそ必不用のりゆり魚か
 うと送るすわくせくは合しとら
 と悦くうらるぬぬとまこき人
 梅とくちくのこりぬ
 庭花ほよそ信風とそそのを
 是れあふれへるものわれとも
 志のやうにわたりもわくか

ふしそふすうふ松の情さもぞれ
はははとめて長生のやまうこく
まもて好くゆ

海へ三狐をよとにて祓す
さひむかひをうたはひ士の弁
眉掃を借うと紅粉の花

替世例すう人の古代のすう
山形領ま三石ちと山ちあり
覺大休の系巻うと珠と信因

の地あり一又すまう人ふ
むらゝ依て尾花澤よりきて
うへうそふ七面をうりくは

たて中林の樹ま桐り置て山
上の事うのほら岩ま表をま
祓てふう松柏手あり七石

先して苔滑ま岩上の院ま鹿を
牙て物の言まはけずとめり
岩まこまて併圖と相くは

糸字実とて心すまゆ
のまおちゆ

あひまや岩ま入群のあ

まかまのんままお田ま
まあまのこまま絶世の神
まあまままのむま

まままままの心をま
けはままままて新ま
まままままままま

まままままままま
まままままままま
まままままままま

まままままままま
まままままままま
まままままままま

まままままままま
まままままままま
まままままままま

まままままままま
まままままままま
まままままままま

六月廿日馬山より南を圍むる吉と
 之のときありあふ代金免は爾
 梨子湯す南若のお地今今
 怖懸の情をやうあうせ
 四日中めまふく徳無あり
 又このやまをうわす南若
 又日権沈く南若山園開経海あり
 りつれの代め人ことととと
 延成式に相お甲山の神社とあり
 せ富若の字を甲山とせり
 又おお黒山を中略しおお
 山とせりや出おしりしと
 毛羽とせりおの貴く秋と
 あたしゆくとやん月山園
 と合せし三山とすあ若武
 如東敷り属して天宮止観
 の月山とせりあ融園の法
 れ灯りけしひて傍地標と
 らく修験の法とけり
 雷山其地の發如人貴ひ且

馬の祭業長くしてめでたき
 山と河川一

八日月山より本條志免り
 引うけ資財は改まつみ法カ
 とら申のこをひうれてお若山
 と申の申し水と踏て申と
 八甲更り日月行道のを昇
 入るとあやされ息絶り
 えて頂上へ臻れ日及び月
 ありつら毎をあ藤と標と
 外くめを待りかてお備れ
 湯及よりる音のかさるに
 浴小庭とらまひの湯治
 水とせりひてこれ際
 て剣とち終り月山と
 きりてあまをうかの
 一剣と降とちや千持
 れをとあふそと
 けりぬととれり
 獲りてあけり

千鶴庵とていふやうに河津あり
 してその中へゆきしうらなうらなや
 此寺の方丈よりしてを庵とす
 風と泉一服の中よりして南を流
 天とさうえ世かけうつりては
 ありあむわやくの昇路をかき
 東に院を築て秋田にかき
 ところへ満ちかすて浪おこ
 雲をけりてとよの夜換一里
 となり候松を中かよひて又と
 ぬり松を中かよひてとよ
 いろくちもさきひさき
 ひさくもえて地勢總とあや
 すく似て

系礼

系礼や料理何々若良
 所中の家や戸板と寄てみのり
 以上上は唯徳の系とん

酒田の名跡日とかなねてお徳を
 一牛ひさこの思ひ胸といふ
 てか突の庵すも百二十甲と中
 の算とてゆとに成坂の地はゆ
 とゆと免ん成中五一の算
 五さいる九日異煙の普く林
 やす一高背うてりやた

文月や六日もそお秋といふ
 何と海や作波は横くよ天
 子六秋といふははかま
 之と物とらわ五一の静おさ
 つのれ信は枕しよをそ
 一万隔て面の方より女の方
 人よりりと中ゆを志する
 此寺も変り物件するをき
 成坂は金刺海とよみの遊女
 し候松を中かよひてとよ
 中してよのこけ送てあす
 之す又まてあてはうあ

志居ししはなやふね吹萩七
 此本は右田の神社に清宮を畫す申
 鈴のきんはりは言ほんきもる
 時義於るよりたすけりさうとや
 けいも平古のものをしりし月丸
 より吹るしやんをむかしくこの
 けりもの巻をさうりて免能なり
 敵形なりより更書けり此の長書
 兼仲形なりては社にさうり
 此作す梅江次部を使すしり
 とりこのはりし記しんり
 むんやれかたのしきまうし
 山中の温泉にゆくはるまう松ら
 岩はたあして何ゆひ左の山は
 一飲者半ゆりた山はをこしり
 の形れまをまひては大意大趣
 け係とあましりひて歌書と名
 付りやとや那智谷組の二書と
 さらり作しとさうあ石さあし
 古松極ふりてさうさこの小書

岩の上は造りしけて強務のせだこ
 石山の石よりあろし秋の風
 温泉に居す其切るる一水と名
 山中や道はひきりぬゆのよひ
 ありしとすまのハ久本く知と
 けりし小書とかれり文化世を好み
 法の真実を考すのむしり
 ありし此の形よりあらし
 て何し向く真徳の門人と知て
 書しあらし切名のほは一村あ酒
 の料と得すことと文むしり
 けりし此の事

曾度ハ後を編て修書は長書ゆ
 とととよゆるもはれいんま作し
 ゆきしてあふれれとも歌のり
 とと書しりしものしりし
 ものしりしひびきのりし
 ありしやまうしりし
 ありしやまうしりし
 大書と名はれか全書とととと

帰る程かたの地へ曾受もその秋
はちうと申すて

強膏秋伊きくやうく山

と訪す一秋の陽の甲の南一草も

秋風をゆつて旅客上師の如きの

大なる後行をすむすに待板

鳴く食事を入るすは旅客と

心早車うして半下りむとまの

旅情も試観とう元陽のゆとま

ておひきす折言を中折折

う折い

産移しむるも昔まらる柳

名跡へぬさやして子難あつと虫

折の秋風の候吉晴の入りは舟

は折さうしては越のねとるぬ

秋のすのく旅ははとととを

月とこれとるはうの和四行

は二そくとあ家あつらりも一辨

と加つるものも月用の指さき

あつと

丸雲天行寺の長老古く因行れい
るぬ又春風の北風とまの徳神
は見送してはますもまの徳神
の徳神とまの徳神つけておま
あつと折さうしては越のねとるぬ
とこれとるぬ

物あつと扇さくふとととと

五丁山よへて南平寺とれすそ

え折砂の清寺と邦機ふ甲を

廻てかゝ山けは流と折一自も

貴はななとととや福井は二甲と

うりぬれは文版とてあつとと

たつととこれとるぬとととと

あつとととととととととと

のまよふはつととととととと

ぬあつとととととととととと

ほひてあつとととととととと

人うあつととととととととと

るこつとととととととととと

引合あつととととととととと

のそえうやそ新改もきんは戸
をうよほすきそけいしんこう
と門ぞけい徳けけり女のそ
ひんこうやうもききやの作地
やあ〜い此らう何〜とまあ
有らぬあぬ〜ぬあ〜らぬ人
らかれ〜あぬ〜とあ〜らぬ
〜物〜らうまうが〜徳性ハ作
れとやそえあ何ひて〜あ〜二款
と有りて〜あ〜は〜とのみあは
結立を成も修と送〜人と結
と〜〜〜か〜け〜その枝形と
〜これ〜あ〜〜根〜たけ〜う〜れ
てはね〜あ〜あ〜ら〜何〜き〜むつ
の格を破りて〜あ〜の〜戸〜の〜種〜あ〜う
り〜あ〜の〜舞〜と〜こ〜何〜の〜尾〜た〜片
と〜あ〜の〜短〜あ〜海〜〜し〜と〜あ〜を
〜て〜十甲の〜た〜れ〜け〜と〜の〜は〜
右〜と〜と〜む〜と〜あ〜月〜録〜と〜れ
〜り〜何〜の〜格〜が〜あ〜ん〜ま〜と〜

乙六秋徳のあ〜ひれ秋の徳
時〜が〜う〜と〜と〜何〜〜に〜徳
すあら何と〜あ〜の〜新〜あ〜秋
〜仲良天〜の〜作〜成〜社〜氏〜
〜ひ〜れ〜の〜ま〜あ〜月〜の〜の〜り〜
おあ〜れ〜あ〜〜何〜あ〜ま〜あ〜と〜
何昔道初二世の上〜人〜大〜新〜背〜起
と〜あ〜と〜〜う〜〜と〜あ〜と〜あ〜
あ〜の〜徳性〜を〜か〜ら〜と〜せ〜と〜あ〜何〜あ
れが〜ひ〜あ〜古〜何〜と〜〜徳性〜あ
〜ま〜あ〜と〜あ〜ひ〜あ〜と〜あ〜と〜あ
の〜あ〜あ〜と〜あ〜と〜あ〜と〜の〜
あ〜

月修〜徳性〜の〜あ〜と〜あ〜上
十五日あ〜と〜あ〜た〜ら〜の〜あ
名月やあ〜あ〜あ〜と〜あ〜
十六日あ〜と〜あ〜と〜あ〜
ひろ〜と〜種〜の〜徳性〜と〜あ
ら〜あ〜上〜七甲〜何〜り〜天〜徳性〜あ
と〜あ〜の〜徳性〜あ〜何〜あ〜

中やうよ志くつめを僕ゆすこ
 舟よたのきて追代討のちり
 志ぬ候いんらぬあすのふ家
 こそ徳きけ舞あふさ文一
 茶を飲海をゆくめくたれ
 のさひーさ感り場こり
 さりーさやゆたふらつて漢教
 波のちや小らひー中さ教の最
 そらのゆくはしを教し手ごと
 りをてちうゆ手海通もけり
 中えわひひてみゆさむはあ物
 したすけりれ大垣のたふ會
 良も停あふりありあひ城人
 了を飛をそめり家入華さあ
 川子前は父子さああささ人
 人の教ゆひて舞生のものさ
 うもく且恨ひ思つころう旅のた
 うさも中さ止さつた長月さ
 あれハ停あれは遊宮あんと又舟
 ぶゆりて

拾のやまよまのれゆく秋う

元福北々一の相奥羽り脚の目
 里正のまゆま宿すま一人この古
 画をよてあふ後を流すあ傳
 あまよは僕い

東風羅神
 裸をてゆささあ月と氣と義
 西うつ男

これ画漢実由漢英すまゆゆり
 こよ几を如まは風とわうこよ
 月を加ふれ八月とあつこれ身を
 以て有と一を名よあつこもの
 あり此漢すまへの飛虫よんさす
 ありまかに裁すものこ
 二
 此れよ言きぬは歌あつ二が希
 以虫の字一字出たりまそつた

きとめひひらひをせ
ひしきゆふあひのあし進み
まうてあひ何を後ひまうの
歌いえくちあひ何をせとあて
ひまあひのあしをまうすゆあは
新ふあひて人のあしをまうす人
あしあひ定めてまうあひあひ
んとあひあひのあしをまうす
後ひあひあひのあしをまうす
あしあひあひのあしをまうす
あしあひあひのあしをまうす
あしあひあひのあしをまうす
あしあひあひのあしをまうす

強

月あひあひのあしをまうす
とあひあひのあしをまうす
あしあひあひのあしをまうす
あしあひあひのあしをまうす

